この悪魔ライダーに契約を！

花タフ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

悪魔　それは誰しもが心に宿し体内に飼っている魔物

今１人の冒険者が悪魔と契約する。

注

バイス誕生の仕方やバイスタンプ　リバイスドライバーの扱いは本編仮面ライダーリバイスとは異なることをご了承ください

そして題材にしてるのが現在放送中の仮面ライダーリバイスなので投稿頻度は遅くなると思います

なるべくオリジナル設定は付けず本編の設定などを上手く入れていこうと思います

目次

この冒険者に契約を！ ―――― 1
この謎なやつの正体を ―――― 23
このライダー博士に説明を ―――― 38
この冒険者　ヤバいんじゃ！ ―――― 67
この悪魔にクエストを ―――― 93
人間関係！仲良くせい！ ―――― 111
この誘拐に救済を ―――― 146
番外編　花タフとこのすばメンバーのライダー映画感想言う回 ―――― 166
仮面ライダーリバイスの名場面をこのすばメンツで再現 ―――― 173

この冒険者に契約を！

この冒険者に契約を

悪魔

それは人間誰しもが心に宿し体内にかかっている魔物

今

1人の冒険者が悪魔と契約する！

ここは異世界の街アクセル

そこにあるひとつの屋敷にはある冒険者が住んでいる

その冒険者パーティはリーダーは最弱職の冒険者
メンバーはアークプリーストにアークウィザードそしてクルセイダーと上級職なのだが、、、

カ「いかんせんダメダメなんだよ、、
駄女神に？爆裂娘に？変態クルセイダー？　、、あー！なんで俺の異世界生活はこん

ななんだよー！」

ア「朝っぱら何騒いでるのよ！」

め「そうですよ　近所迷惑になります」

カ「うるさい！誰のせいだと思ってるんだ！」

ダ「まぁまぁ　落ち着け　カズマもクエストの疲れなどが残ってストレスなんだろう、、　わ　私なら　そのストレスの捌け口になっても、、／／／」

カ「結構です」

ダ「くっ／／／　、、さ　さすが　カズマだ、、焦らしプレイとは、、」

カ「はぁ、、　でもクエスト疲れってのは本当だからな　今日は1日自由でいいぞ　」

ア「本当！なら　朝からシュワシュワ！」

とアクアは一目散に自分の部屋へと向かった

カ「、、、あいつ朝っぱらから飲む気かよ、、」

ダ「それじゃあ　私はクリスに会ってくる」

カ「おう　いってらー」

、、、さてとどうするか　、、、今日は久々にサキュバスのお姉さんにお世話になるのもいいな、、、

め「カズマ　カズマ」カ「はいカズマです」

め「今日の爆裂散歩に行きましょう！」

カ「えぇー　嫌だ」

め「カズマ行きましょう　でないと今ここで打つことになりますよ」

カ「まてまてまて！それはやめてくれ！」

め「エクスプロージョン！」

めぐみんはいつものように使われてない廃城目掛けていつものように爆裂魔法を放つ

め「あぅ」

カ「うーん　今日の爆裂魔法は少しいまいちだな、、もうちょい　熱風が欲しかった」

め「ぐぅ　今後の課題ですね」

カ「今日のは多く見積って６４点だな」

め「うぅ　次こそは１００点を目指しますよ、、そしてカズマ　おんぶお願いします」
カ「はいはい　よいしょっと」
め「いつもありがとうございます」
カ「別にいいよ、、そうだ　めぐみんちょっとウィズの店に寄りたいんだがいいか？」
め「いいですよ　なにか用があるんですか？」
カ「まぁちょっとな　」

？「お前、、　そうやっておんぶして
胸の感触感じてやがんなぁー　すけべななヤツ　すげべなヤツ！」
カ「はぁ!?　誰がそんなこと！」

め「わぁ！　なんですかカズマ　急に大きな声を出さないでください」

カ「え？今のお前じゃないのか」

め「なんのことですか！」

カ「、、、いや　なんでもない」

謎に聞こえてきた声はなんだったのか謎だったが　俺たちはウィズの店へと向かった

だがこの決断が俺の人生を大きく変えるとはこの時の俺はまだ知る由もなかった

ウ「いらっしゃいませー
あ!カズマさん　めぐみんさんどうも」

カ「よっ　ウィズ　　」

ウ「　今お茶を入れてきますね」
とウィズは店の奥の方へ行った

カ「相変わらず　いっぱい商品があるな　なになに魔よけのポーション　これを飲むことにより魔物に近づかれなくなる、、ただし飲んだあと悪臭が体から出るので人にも近づかれなくなる　、、売れるかはあれだがな、、　ん?」

ウィズの店の商品を一通り見ていた時
ある物に目が止まった
それはまるでスタンプラリーなどで使われるぐらいの大きさのスタンプがあった
カ「　これ、、スタンプか?　」

底部分に　まるで恐竜のような刻印が彫られていたそして
カ「んで　もうひとつは、、、ベルト？」
その近くに派手な色をしたまるでベルトのような物が置いてあった
ウ「お待たせしましたー　、、、カズマさん？」

カ「ん？あぁ　そこに置いてあったんだ　これ見た感じスタンプとベルト？っぽいけど」

ウ「あぁ　そのスタンプのようなもの
ある人から受け取った物なんです」
め「ある人？」

ウ「はい　あれは数週間前のことです
私は魔道具を仕入れるために少し街まで行ったんです。そこで、、」

回想

？「あーちょっとそこのお姉さん」
ウ「？」
？「あなたですよ　あ　な　た」
ウ「わ　私ですか？」
？「そうだとも　　見たところ魔道具の店を行ったり見たりしてるようだね」

ウ「はい　私お店をやってまして　その商品を買いに」
？「なるほど、、ではこれなんてどうでしょう」
謎の男はスタンプのようなものとベルトのような物を渡した
ウ「これは、、　あのこれは一体どんな、、　え？」

渡された後男の人の方を見ると

誰もいなかった

ウ「あ　あのこれいくらなんですー！」

回想終了

カ「で貰ったものをそのまま商品として飾っていたと」

ウ「はい　あとその男の方がいたところにこんな紙があったんです」

め「紙ですか？」

ウ「はい　これです」

そこにはこう書かれていた

その２つを使って身を変えることが出来たならこの場所へ来てくれ

と文と地図が書いてあった
カ「身を変える？　どういう事だ？」

ウ「私もさっぱりで1度この紙に書かれていた場所に向かったのですが　何も無かったんですよ」

カ「、、なぁウィズ　ついにゴミを貰ってきたのか？」
ウ「いえいえ　そんなことないはずです　魔道具のようなものではありませんがきっときっと何かに使えるんです」

カ「何かねぇ、、、、なぁウィズ　ひとつ聞きたいんだが　あのスタンプとベルトには邪悪な魔力とかないよな？」
ウ「え？、、はい呪いのようなものはありませんでしたね」
カ「なるほど、、じゃあ　俺が買い取るよ」

め「え?!大丈夫なんですかカズマ？またその道具でなにか起きてしまうんじゃ、、」

ウ「い　いいんですか！」
カ「あぁ　俺もこれについてちょっと興味が湧いてな　自分でも色々調べてみようと思ってな　なぁこれいくらなんだ？」
め「大丈夫なんですかカズマ？またその道具でなにか起きたら」
カ「まぁその時はアクアに払ってもらうとかだな　なぁウィズこれいくらだ？」
ウ「あぁ　タダで結構ですよ」
カ「え！」
ウ「私もタダで貰ったものですしそれを金を払わせるのは商人としても気が引けてしまうので」
め「このリッチー変な所で律儀ですね」
カ「そっか　じゃあ有難く受け取るよ」

そうして俺たちはスタンプとベルトを譲り貰い　店を後にし館に戻った

そしてその夜

カ「うーん、、なんなんだ　これって、、」

め「カズマー入りますよ」

カ「おぉ　めぐみんか　いいぞ」

め「失礼します　それってウィズの店から持ってきたやつですか？」

カ「あぁ　一応あれから調べてみたんだが　どうもな　あ　でも何個かわかったことがある」

め「なんです？」

カ「まず　このスタンプの様なやつの上のとこを押すと」

ＬＥＸ！

め「おぉ！　音がなりました！」

カ「そんでスタンプみたいにも押せるということがわかった」

め「その大きい方はどうなんですか？」

カ「こっちは　いまいちだな　でも
こいつはこうやって腰に当てると」

俺が腰に当てるとそいつから帯が飛び出し腰に巻き付く

め「おお！　」

カ「こんな感じで自動に着くってことがわかったってとこだ」

め「凄いですね、、」

カ「あぁ　でもな　なにか物足りないんだよな、、ん？」

俺はふと下の方に目線をずらす　すると

まるでスタンプを押すような白い四角のスペースがあった

カ「もしかして、、　ふん！」

俺はそのスペースにスタンプを押印した

すると

Ｃｏｍｅ　ｏｎ　Ｌ　Ｌ　Ｌ　ＬＥＸ！
Ｃｏｍｅ　ｏｎ　Ｌ　Ｌ　Ｌ　ＬＥＸ！
め「わぁ！」
カ「なんだ!?」

突如にスタンプから音が流れ出る

すると

？「なぁ！　そのベルトの端にはめれそうじゃね？」

カ「だ　誰だ！」

またあの声だ、、、端にはめる、、、

俺はそのままスタンプをベルトの端にはめた

そして　傾ける

Ｂｕｄｄｙ　ｕｐ！

オーイング!ショーニング　!
ローイング!　ゴーイング!
仮面ライダー!　リバイ!バイス　!
リバイス!

カ「、、、一体何が起こったんだよ、、」

め「か、、、カズマ、、、」
カ「ん?どうしためぐみん」
め「どうしたも何も自分の姿見てくださいよ!」

カ「自分の姿って、、、」

俺は自分の体を見ると

カ「は？」

体はピンクと水色の入ったカラー
胸には先程のスタンプに彫ってあった
恐竜の印
顔は白い牙に赤い複眼、、、

そして、、、隣に

バ「ひゃっほーい！　やっと出られたぜ！

やだ！俺っちってそんなに魅力的？」

、、ん？何　さっきからこっち見て

何かいる

カ　め　「ぎやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあ！」

父さん　母さん　俺

異世界でどうなっちゃってるのーーーーーーーーーーー！

この謎なやつの正体を

この謎なやつの正体を

カ「な　ななんなんだお前！」

バ「俺っち？　　そうです　俺っちが
悪魔さんです 」

カ「そんな変なおじさんの流れはいいんだよ！」

め「なんなんですかあれ、、」

カ「こっちが聞きたいよ」

ア「うるっさいわねー今何時だと、、」

と俺達の声を聞いてきたアクアが部屋に入ってくる

ア「、、、へ？」

カ「あ」

バ「？なに　俺っちのこと見て」

ア「、、、誰？」

かくかくしかじか

ア「なるほどねぇ　そのベルトを使ったらこの姿になっちゃったと」

カ「、、、まぁそんなところだ」

バ「んー」

俺の姿が変わったと同時に現れたあいつは何故か俺のベットに寝転がっている

カ「、、、それと　、、、おい！」

バ「ん？なに？俺っちのこと呼んだ？」

カ「あぁ　お前一体なんなんだよ」

バ「俺っち？俺っちはね

悪魔だよ」

カ　め「悪魔!?」

ア「なぁんですってぇ！」

バ「俺っちは　そこの兄ちゃんの心に宿ってた悪魔なんだ　そして今　俺っちは開放された、、つまり　暴れまくってやるｚ」

ア「ターンアンデッド」

バ「ぎゃぁぁぁぁぁ！

ちょっと！いきなり何するの！」

ア「な!?私のターンアンデットが効かないなんて」

カ「いや　ぎゃぁぁぁぁぁ！って言ってたぞ」
め「、、、あなた　本当に悪魔なんですか　名前は？」
バ「ん？俺っちに名前はないぜ」
め「そうなんですね、、　ならば私がとてつもなくかっこいい名前を考えてあげましょう！」
カ「はいはい　それは後でやってくれ、、で、、一体俺はどうすれば元に戻るんだ、、」

俺はベルトを少しいじる

そして　ベルトに刺さったスタンプを
1度傾けたあとにスタンプを抜いた
バ「ん？え！ちょっと待ってー！吸い込まれるーーー！」

それと同時にあの悪魔らしきやつがおれのなかにはいっていった

カ「うぉ！　、、、って元に戻ってる！」
バ「ちぇ！　せっかく自由になったと思ったのに」
カ「うぉわ！　お前！」
カズマの体から幽霊のように飛び出る
ア「カズマ　そこに抑えてなさい！今浄化してあげる」
め「ちょっと！2人とも何が見えてるんですか！」

と言ったことがあった
その後とりあえず状況が落ち着いたので　眠りにつくことにした

次の日

カ「、、、結局寝れなかった」

バ「寝不足か？寝不足はお肌に悪いんだぜ？何か原因があったのか？」

カ「お前のせいだよ！お前の！、、、はぁ　」

カ（こいつ、、、一体なんだってんだよ、、、アクアにも浄化出来ない悪魔ってなんなんだ、、、）

と俺はベットから起き　ふくにきがえようとする

その時　ふと机に置いてあった紙に目がいく

カ「これって　ウィズにこれらを貰った時に一緒に貰った紙、、、」

バ「ん？なになに？お宝の地図か？」

確か　身を変えることが出来たならここに来いとか、、、ん？身を変える、、、

カ「もしかして、、、」

平原ｓｉｄｅ

ア「ねぇ～カズマー遠くないですかー」
カ「あとちょっとだ　我慢しろ」
バ「なぁなぁ　そこに向かって何をする気なんだ？」

カ「お前は少し引っ込んでろ」
ダ「？どうしたんだ　急に」
カ（そっか　ダクネスは昨日のことを知らないんだったな、、）
カ「あぁ　いや　なんでもない」

と走行している間に

カ「、、、ここか」

地図によるとここなんだが、、、

カ「、、、確かに何も無いな」

め「結局その地図はなんなんだったんです？」

カ「わからん、、」

バ「、、、んー？ねぇ　カズマ！ここになにか穴があるぜ！」

カ「はぁ？そんなのどこにも、、」

と俺はあいつが指さす地面を見たら

まるで隠しカメラのようにカメラが隠されていた

カ「カメラ！なんでこんなに、、、」

カ「、、、もしかして」

俺はバックの中に入れていたベルトとスタンプを取り出す

バ「うぉ！変身しますか！」

とこいつは俺の体の中に入った

ダ「カズマ？なんだそれは」

ア「まぁ見てなさいって　」

俺はベルトを腰につけスタンプのボタンを押す

レックス！

そして俺はベルトのスタンプ台に

押印する

Ｃｏｍｅ　ｏｎ　レ　レ　レ　レックス
Ｃｏｍｅ　ｏｎ　レ　レ　レ　レックス

カ「はぁ！」

ベルトにスタンプを指し傾ける

Ｂｕｄｄｙ　ｕｐ

オーイング！ショーニング　！

ローイング！　ゴーイング！

仮面ライダー！リバイ　バイス

リバイス！

バ「はぁ～い　よいしょっと！」

カ「、、、！」

その時だった

突如草原の地面の下から

階段のようなものが現れた

め「なんです　この階段、、」

ダ「な！　な　か　カズマ！一体その姿は、、」

カ「あぁ、、実はな」

かくかくしかじか

ダ「なるほど、、、　そのベルトを使うとそのように姿を変え　あの悪魔を呼び出せるということか」

カ「あぁ　でもなんでこれで変わるとこいつが実態を持つのかが分からねぇ」

バ「なぁなぁ！そんなことよりもよ！この下行ってみようぜ！」

とあの悪魔が1人で行ってしまった

カ「あ！おいまて！悪魔！」

ア「ちょっと！女神よりも先に行くなんて　悪魔のくせに！」

め「あぁ　2人とも置いてかないでください！」

そして俺たちはあいつを追うように地下の方へと行くのであった

このライダー博士に説明を

このライダー博士に説明を

俺たちは地図に書いてあった場所行き

そこであの姿になるとなんと　地下に続く階段が現れた　果たしてそこには何が

カ「、、、　だいぶ降りてきたけど　まだつかないのか」

バ「ねぇ　真っ暗なんですけどー

俺っち　真っ暗こわーい」

ア「悪魔が何を言ってるのよ、、」
ダ「、、、というか　珍しいな　ウィズの時同様悪魔が目の前に現れたらすぐ浄化しようとするアクアが大人しいなんて」
ア「それがこいつ何度も何度も浄化しても　ぜんっぜん　消えないんですもの」
バ「へへー　俺っちを倒したければこのカズマを殺せば早い手段かもねー」
カ「はぁ!?　なんでだよ!」
バ「カズマが死んだら俺っちも死ぬって訳」
ア「なるほど、、カズマそこを動かないでちょうだい、、大丈夫　すぐにリザレクションをしてあげるから」
カ「そんな簡単に自分の命差し出せる訳ないだろ!　こいつのはらい方は他にもあるかもしれないだろ!だから俺を殺すという選択肢は二度と使うなよ」
ア「い　いやねぇ　カズマ　冗談よ冗談、、　はんぶん」
カ「おい」

バ「！ねぇねぇ！見てみて！あそこになんかドアがあるぜ！」
といつの間にか俺たちはその地下の最深部に来ていたようだ
め「本当ですね、、　鍵は、、」
とめぐみんがドアノブを握り開けようとする
め「！開いてますね、、」
カ「なんとも不用心なとこだな、、」
バ「いや　地下に隠してる時点で結構用心だと思うぜ」
カ「、、なんか論破された気分だ」
と俺たちはそのドアをあけ中に入る

カ「、、、これって、、、研究室か」

め「そのようですね、、ですが」

ダ「あぁ　見るからに新しい物のようだ」

ア「ってとこは誰かいるのかしら」

？「Ｈｅｙ　誰だい？　人のラボに立ち入る　輩は」

カ「！だ　誰だ！」

バ「なになに　敵か！」

？「、、、　ふっははは
なぁんてね　君たちがここに入ってきたことは知ってるとも　何せここに招いたのは　私なのだからね」

と研究室の奥から

メガネをした若い博士？のような人が
出てくる

め「招いた、、、とは」

？「　さて　自己紹介をしよう

私は　ジョージ　狩崎　そのベルトの開発者だ」

ダ「ジョージ狩崎、、ここらじゃ聞かない名だな」

カ「、、、ってまて　ベルトの開発者ってこれってあんたが作ったのか、、、！もしかしてこれをウィズにあげたのは」

ジ「あぁ　私だ」

め「、、なぜウィズに渡したのです」

ジ「いや　実の所商人の誰でもよかったんだ　商人に渡りまた人へ人へと流れてゆき変身できるものがここに訪れるのを待ってたんだ」

カ「待ってたって、、ってそうだそもそもこれはなんなんだよ！スタンプ傾けたら姿変わるわ悪魔出てくるわ」

ジ「それはそのドライバーのおかげさ

私が作り上げた最高傑作

リバイスドライバー！のね」

カ「リバイス、、、ドライバー」

ジ「そして今変身している君たちは、、、

仮面ライダー　リバイ

仮面ライダーバイス

合わせて

仮面ライダーリバイスさ！」

カ「仮面ライダー、、、リバイス」

バ「、、、？バイスって　俺っちのこと？　やばいっす！超かっこいい！」

ジ「君は選ばれたんだよ　そのドライバーに　」

カ「選ばれた、、、」

ジ「本来そのドライバーは選ばれたものしか使えない　その他の人間が使うと　その使用者の中にいる悪魔が解放され暴れることになる」

カ「そんな危ないもの放り投げたのかよ　こんなやつみたいなのが暴れられたらたまったもんじゃない！」

ジ「だが　君は選ばれた　君は君の悪魔をコントロールする力を得たんだ！
それを見込んで君に協力来て欲しいことがある

君の持ってるそのバイスタンプという物、実はバイスタンプはあと9個残っているんだ　君にはその回収をしてもらいたいんだ」

カ「回収、、」

ジ「あぁ　元々私が所有してたのだがこちらの世界に来る際どこかへいってしまってね」

カ（こちらの世界って、、　まさかこいつも、、　転生者なのか）

カ「、、、　いきなり集めろって言われたって素直にはいと言えると思ってるのか」

ダ「その通りだ　我々はまだお前を信用してないぞ」

ジ「、、、それもそうだね　ならばこうしよう　そのリバイスドライバーを君にあげよ

う　それを使えばあらゆる力を手に入れられる　メガロドン　イーグル　ライオン
マンモスなどなど、、、
君たちは冒険者だ
戦力はあった方がいいだろう
そしてこちらからリバイスドライバーを提供すると共にバイスタンプの回収をしてもらいたい、、、
君たちは力を手にして冒険を楽にできる　私はスタンプが集められて嬉しい
どうだい？ＷｉｎＷｉｎだろ」

カ「、、、」

ア「、、、ねぇ　さっきから何話してるの」

カ（こいつはそもそも理解してなかった）
カ「、、、確かに　こっちとしてもそんな力を貰えるのはありがたいけど
いくらなんでも怪しすぎる　、、、
悪いけど　その交渉にはのれません

そしてこのドライバーも返します」

バ「えぇ！なんでよ！せっかく使えるのに!?」

カ「俺は最弱の冒険者だ　俺以外の選ばれたやつがそれを使えばいい」

ジ「ふむ、、」

カ「じゃあ　俺たちは帰ります

失礼しました　帰るぞお前ら」

ダ「お　おう」

俺たちはその研究室を出て地上に戻った

ジ「、、ふーむ　困ったものだ　また新しく使えるものを探さなきゃいけないとはね、、　さてまたドライバーとバイスタンプを商人に渡しに、、ん？

Nooooooooooooooooooooooooooooo!!

ない！ない！ない！

レックスバイスタンプが、、、ないーー!?」

地上ｓｉｄｅ

俺たちはあの地下を後にしアクセルへ戻っている

バ「ねぇねぇ！なんで返しちゃったの！あれないと俺っち実態持てないのよ！」

カ「持たなくて結構だ！　お前が暴れられないようにずっとその姿でいさせてやる」

ダ「、、、一応悪魔と話しているのか？」

め「はたから見たら何も無いところに話しているやばい人みたいですけど」

カ「、、、ってかアクア　なんかさっきから喋ってないがどうしたんだ？」

ア「へ？い　いや　別にーなにもー」

カ「、、、お前何か隠してねぇか？」

ア「へ？なに　なんのことよー」

カ「スティール」

ア「あぁ！ダメよカズマ　ダメ！」

アクアにスティールすると手になにか握ったことがあるものが取れた

カ「！お前これバイスタンプじゃねーか！盗んできたのか！」

ア「だって！それを売って今晩のシュワシュワのお金にしようとしてたのよ」

カ「ふざけんな！これは今すぐあの人のところに返すぞ！」

ア「まって　まってよカズマー」

とその時

アクセルの入口付近に爆発が起こる

一同「!!」

カ「なんだ！」

め「アクセルの方からです」

ダ「また魔王軍の襲撃か」

ア「ちょっと！みんな待ってよー」

俺たちは急いでアクセルの方へ向かった

アクセルｓｉｄｅ

ダ「はぁ！　ったくなんなんだよ！こいつら　倒しても倒してもキリがねぇぐらいいやがる！」

リ「ブレード・オブ・ウインド！
本当ね、、！ダスト後ろ！」

ダ「!!ちょ」

ク「バインド！」

リ「！クリスさん」
ク「気をつけて　こいつらは悪魔だから　、、　しかも次々湧いてくるなんて」
ダ「悪魔!?　なんでこんなところに」

カ「おーい！みんな無事か！」
ダ「カズマ！いいところに来た　お前の起点であいつらどうにかできねぇか

デュラハンの時見てぇによ」
カ「んな事言ったってすぐには」
め「！来ます！」
ア「セイクリッドターンアンデット！」

アクアが突如襲ってきた悪魔に浄化魔法をかけると浄化され消えた

ア「こいつらには効くのね、、」
バ「うっひょー！楽しそうだな！」
カ「お前は出てくんな」
カ（にしてもこいつらなんなんだよ、、ん？）

俺は悪魔たちが次々出るところを見つける

カ「あそこに何かあるのか、、」

カ（千里眼！）

千里眼でそこを見てみると

そこには見るにも恐ろしく凶暴な化け物がいた

カ「なっなんだよあいつ、、」

め「数が多いなら私の爆裂魔法で吹き飛ばしますよ」

カ「、、、あぁその方がまだいいかもな　めぐみん！頼む」

め「任された！

黒より黒く闇より黒き漆黒に我が深紅の混合を望みたもう覚醒の時来たれり無謬の境界に落ちし理　無限の歪みとなりて現出せよ！

エクスプロージョン！」

めぐみんは悪魔達が湧き出る所へ爆裂魔法を打ち込む

め「あぅ　燃え尽きろ　紅蓮の中で」

ダ「、、、やったのか」

カ「ちょおまそれフラグ」

その時

爆裂魔法が打たれたクレーターから
何かが近づいてくる

カ「!!さっき千里眼で見た、、」
ア「嘘でしょあの爆裂魔法に耐えるなんて」

バ「ほっほほー!あいつ強そうだなー!」
カ「お前は黙ってろ!」

そしてやつが現れる

見た目はまるでマンモスと虫の体を混ぜたような見た目をした見るだけでやばい奴と判断できるやつだった

カ「この間のデュラハンぐらいやばいやつだぞ、、」

ア「見たところあいつも悪魔のようね！なら　セイクリッドターンアンデット！」

アクアはその化け物に魔法をかけるが

ア「なっ!?全然効いてない！」

カ「どうやらあの沢山いた悪魔より強いってことか」

がぁぁぁぁぁぁ！

ジュニア！

化け物が地面に何かを押したその時

同時に多数のあの悪魔達が出現した

カ「！あいつまたあの白い悪魔達を呼びやがった」

ダ「来るぞ！」

俺たちは各々であの悪魔を対処する

め「すみません私が仕留め損なったばかりに」

カ「お前のせいじゃねぇよ　お前はここにいろ　あいつらは俺たちでどうにかしてみる」

ア「ターンアンデット！ターンアンデット！カズマこいつら倒してもキリがないわ！」

カ「くっそ　、、　クリエイトウォーター！フリーズ！」

俺は悪魔たちの足場を凍らせ動きを封じる

が

ががぁぁ！

悪魔は氷を直ぐに壊し俺に襲いかかる

カ「なっ！がぁ！」

ア「カズマ！」

カ「はぁ、、、はぁ、、、くっそ」

バ「なぁ？そろそろ言おっかなって思ってたんだけど　お前俺っちのことどう思ってる訳？」

カ「だから出てくんなって！」

バ「まぁそう言わない　それとひとつ提案があるんだ」

カ「提案？」

バ「俺っちと契約しねぇか？」

カ「契約、、、だと、、、」

バ「そう、、、悪魔に魂を売るんだよ
ぶはははは！」

カ「、、、」

ア「きゃあ！」

カ「！アクア！」

ア「くぅ、、！」
化け物がアクアにジリジリ近づく
ダ「アクアに手を出すな！」
倒れるアクアの盾になるダクネス
カ「アクア！ダクネス！　ぐっ、、」
バ「俺っちと契約しろ！そしたらあの２人もここにいるやつらも全員守ってやる」
カ「本当か、、」
バ「あぁ！あそこに転がってるバイスタンプを体に押して俺っちを呼び起こすんだ
そしたら俺っちがぶっ飛ばしてやるよ！」
カ「、、」
バ「相棒　今ここでやらなきゃ一生後悔することになるぜ！」
カ「、、、くっ！」

俺は走り出しアクアが持っていたバイスタンプを拾う

カ「はぁ！、、、はぁ！、、、」

それで、、、あいつらを守れるなら、、、

レックス！

カ「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

俺は体にバイスタンプを押した

その直後体に激痛が走り何かが出るような感覚に襲われる

カ「がぁ！はぁ！、、、」

そして俺の体から

バ「んんんん、、、ばぁーーーーん！」

あいつが

バイスが実態を持ち現れた

この冒険者　ヤバいんじゃ！

この冒険者　ヤバいんじゃ！

前回　カズマ達はあのベルト
リバイスドライバーの製作者　ジョージ狩崎に会い　協力してくれと頼まれる
がカズマはそれを断りベルトも返却した
その時　アクセルの街に突如悪魔が襲撃
窮地の末にカズマが出した答えは

悪魔と契約することだった

バ「いやっふーーーー!やっと出れたぜ!ふっふー!じゆーだー」

カ「これが、、、契約、、」

ぎゃぁあ!
カ「!おい後ろ」
バ「む?　ふん!」

ぎゃぁあ
後ろから襲ってきたあの化け物をバイスは避けパンチをくらわしアクセルの壁に飛ばす
バ「いやっほーーい!、、、さてと」
カ「はぁ、、はぁ、、!おい!そっちに悪魔はいねぇぞ!」
ア「へ?なに　なになになになに!?」

バ「ぶはははは！　美味そうだな、、」
カ「！まさかあいつ」

ジ「おーい！君！」
カ「!!狩崎さん　なんでここに」

ジ「そんなことはいい　君　これを使え」
狩崎はカズマにあるものを投げ渡す
カ「！それって、、ドライバー、、」
ジ「それを使ってあの悪魔をコントロールしろ！そうすればみんなを守れる」

バ「ぶはははは！、、、いっただっきまーす！」

カ「！、、、ふっ！」

俺はベルトを腰に装着する

バ「！え！なにこれちょっと！戻される　わーーーーーーー!?」

バイスは霊体のようになり俺の体に戻ってきた

カ「くっ、、、はぁ、、、湧いてきたよ、、」

俺はバイスタンプを握り前につきだす

カ「やってやるよ、、」

レックス！

カ（おい騙したな！）

バ（俺っち別に嘘はついてないよ）

カ（アクアを食べようとしたろうが！）

バ（でも悪魔はぶっ飛ばしたよ？）

カ「はぁぁ、、、」

俺はバイスタンプの印鑑部分に息をふきかけ

カ「ふっ！」

ベルトに押印する

Ｃｏｍｅ　ｏｎ！　レ　レ　レ　レックス！

バ「いやっふーー！」

Ｃｏｍｅ　ｏｎ！　レ　レ　レ　レックス！

バイスの霊体が透明なバイスタンプの容器を持ち飛び回る

カ「変身！」

Ｂｕｄｄｙ　ｕｐ！

バ「よいっしょー！」

バイスタンプをベルトに装填そして
傾ける

オーイング！ショーイング！
ローリング！ゴーイング！

仮面ライダー！　リバイ！　バイス！

リバイス！

バ「はぁいヨット！」

カ「、、、」

ダ「なんだよアレ、、」

リ「カズマの姿が、、変わっちゃった」

ジ「、、ぐぅぅぅれぇぇぇぇいっつ！」

バ「うわぁお！　すっげーやっぱり！

あ　カズマちゃんさっきのは冗談だから」

カ「ぐぅ！」

俺はバイスの胸ぐらを掴む

カ「、、お前はあとで殴る！まずはあいつからだ！」

リ「なんなのよ、、あの姿、、」

ジ「仮面ライダーリバイスさ、、、
悪魔を持って悪魔を制す者さ」

リ「、、、誰あなた」

カ「いくぞ　はぁあ！」

俺はあの化け物めがけ垂直に飛び

拳を振るう

がぎぁ！

着地した瞬間　岩を浮かせそれを蹴り周りの白い悪魔達を吹き飛ばす

カ「ふっ！はぁ！」

バ「うわぁお！やるじゃん！俺っちもいくぜ！」

バイスも悪魔目掛け突っ走る

バ「おらおらおらー！　ふっ！とりゃ！　」

次々と悪魔達を吹き飛ばしていくバイス

カ「、、、あいつ強ぇんだな、、、やっぱ」

がぎぁ！

カ「！ふっ　はぁ！」

俺は攻撃を避けながら　蹴りを数発入れる

カ「行くぜー」

ジ「君！」
カ「おっと　、、なんです！」
ジ「ちょっとこれ使ってみて」
と狩崎がカズマの方に何かを投げる

カ「おっとっと、、　ん？新しいスタンプ？」
ジ「手にポンってポンって」
カ「え？、、こう？」

ポンっと音が鳴るとそのスタンプから
まるで斧のような武器が浮き出る

カ「うおっ！すげぇ！」
バ「わーお！すっげー！ハンコ押して敵倒してくから　オーインバスターってのはどう！」

カ「はぁ？勝手につけんな！」

バ「いいじゃん　ね？読者さん？」
がぁ！
カ「！ふっはぁ！」
襲ってくる悪魔を避けながらその斧で敵を切り付ける
バ「いいなー　ふん！俺っちも使いたい！　っとおりゃ！」
バイスは悪魔の下半身を持ちそのまま飛びたたき落とす
バ「悪魔式スクリュードライバー、、、決まったぜ」
カ「はぁ！　ほぉ！へゃ！」
俺はバイスの背中を借り高いところから振り下ろし敵を切る
バ「わーお！何それカッケー！俺っちもー！」
バイスは白い悪魔たちの方へ向かっていく

カ「よし、、　ん？この斧にも押印する所が、、　もしかして」

俺はオーインバスターの下にあるスタンプをそこに押す

スタンプバイ！

スタンプを下に指し斧を構える

カ「伏せろ！」

バ「え？何なんか言ってってうお！」

バイスはギリギリしゃがみたっていた悪魔に斬撃が当たった

バ「っと　危ねぇじゃねーか！

でも俺たちいいコンビになりそうじゃね？」
カ「はぁ？どこが」
オーインバスターのグリップをスライドし押印部分を白くする

ぎやぁあ！

カ　　バ「ふっ！　はぁ！」
襲いかかる化け物に同時に攻撃させ怯ませると

胸の恐竜マークが薄ら光り始める

カ「ん？、、、もしかして」

俺はバイスタンプをベルトから外し
胸に押す　　すると

カ「！うお！なんだこれ！」

俺の足はまるで恐竜のように太く爬虫類のような足になった
がぎぁ！
マンモスの化け物が俺目掛け風を飛ばすがそれを避ける
カ「はぁぁ！ふん！」
着地と同時に敵を浮かし
カ「はぁ！」
その隙をみてキックをくらわす
と同時に足は元に戻った

バ「ねぇねぇねぇ！読者さん！どっちがいいと思う？（カ「お前誰に話してんだ？」）やっぱ強い奴から倒した方が小説的にも面白いよね、、ってちょっと！カズマ！まだ話の続きでしょうが」

カ「一気にいくぜ！」

俺は化け物目掛け走り出しながら
ベルトのバイスタンプを2度傾ける

バ「ってなになに！足になにかきたー！」
カ「ふっ！はぁあ！」
俺は蹴りを使い化け物を地面から浮かす
それを追うように俺たちも飛ぶ
カ「ふっ！」
バ「はぁ！」

俺とバイスの足にバイスタンプの容器のようなものが着く

カ　バ「はぁぁぁぁぁぁぁ！」
レックス！スタンピングフィニッシュ！

２人がキックの構えで化け物目掛け飛んでゆく　その時足裏の５０の文字が光る

カ　バ　「はぁ！」

ライダーキックで化け物も地面に叩きつけると　その化け物は爆発していった

バ「決まったぜー！」

カ「ふぅ、、」

パチパチパチパチ

カ「ん？」

ジ「ブラボー！ありがとう　仮面ライダーリバイス！」

バ「へへん　それほどでもあるよね？」

カ「、、」

俺はベルトのバイスタンプを傾けベルトからスタンプを抜く

バ「え？あれちょっと！いつの間に戻って　あー！戻されるー」

と同時にバイスが俺の体に吸い込まれていった

カ「俺が、、仮面ライダー」

ジ「そうさ　悪魔を持って悪魔を制す
仮面ライダーリバイスさ」
ア「カズマー！」
カ「！アクア無事か」
アクア達が俺たちの方へ近づく

ア「えぇ　、、それにしても勝ったのね」
カ「あぁ　多分な」
ダ「それにしてもあの姿はあんな力を秘めていたとは、、」
め「本当ですよ、、」
ジ「カズマ、、君はカズマというのかい」
カ「え?あ　はい　サトウ　カズマです」
ジ「なるほど君も、、　カズマ君
君に折り入って頼みがある」
カ「なんですか、、」
ジ「前にもいったバイスタンプの回収を手伝ってくれないか」
カ「えぇ、、」

ジ「そもそもそれを使うってことは私の交渉に乗ったと言っても過言ではないか？」
カ「いや　それは状況が状況で、、」
ジ「これはゼロワンの１話と同じなんだよ　使用したらそれはもう君のなのさ！」
カ「なんなんですか！ゼロワンって！」
ア「もうカズマ　いい加減貰っちゃいなさいよーあって困るものでもないでしょ、、悪魔はいるけども、、」
バ「ん？なに？」
め「そうですよ！そんな紅魔族に刺さるものを使わないなんて勿体ないです！」
カ「えぇ、、」
ジ「、、どうだい？」

カ「、、あぁ！分かりましたよ！
これからもこのドライバーは使わせてもらいます！」
ジ「では！バイスタンプ集めも手伝ってくれるのか」
カ「、、まぁそういう話でしたから、、」
ジ「ＴＨＡＮＫ　ＹＯＵ！カズマ！」
狩崎さんは俺の手を握り握手をする

カ「お、おう、、」

こうして俺は数日にして悪魔を制する力と仮面ライダーの力を手に入れたのだった。

予告

合作長編

この悪魔ライダーに契約を！

この素晴らしい世界に祝福を

×

リトライｗｏｎｄｅｒｆｕｌ　Ｗｏｒｌｄ

ディニラス退治から１年経ったある日
両方の世界で
ある日ウィズの店に訪れたカズマ達
そこで見つけた魔道具　この世に存在する　平行世界へ飛ばされてしまうという魔道具をアクアが誤って起動してしまった
それにより

リトすばのカズマとアクアが
このすばリバイス世界に
このすばリバイスのカズマとアクアが
リトすば世界に飛ばされた!?

カ「どうなってるんだ?!」
ア「また　時が戻ったの!?」

め「この頃のカズマは懐かしいですね」
カ「めぐみんが年上!?」

そして各々その世界でひと時の時間を過ごす
カ「このポンコツ感、、、懐かしいな、、、」

カ「めぐみんとダクネスが強すぎる、、、」

しかし

カ「なんだ　あいつ、、」

？「この世の境界に封印されしガラム様をギルス様を、、復活させる時が来たのです！」

復活する歴史に葬られた悪魔達

リミル「かつて　ある平行世界同士をぶつけさせ　二つの世界を崩壊させたと言われる　悪魔達なのです、、」

バ「奴らは悪魔の中でも禁句になるほどの恐ろしい奴　あのディニラス程の力、、いや　それ以上に匹敵するかもしれない　」

２つ両方の世界で　ある悪魔達が世界崩壊を企んでいた

その名は　ガラム　　ギルス

奴らは平行世界同士をぶつけ合い　この世の全てを壊すほどのビックバンを起こそうとたくらむ悪魔

ダ「この世界も平行世界も破壊はさせない！雷鳴剣　剣技！」

め「そちらのカズマにも伝えなくては、、」

オーバー「ここまでなのか、、」

だが

カ「この世界を２度も破壊されてたまるかよ、、」

リバイ「たとえ別世界だとしても　こいつらは存在する、、」

『俺達はこの世界を』

カ「絶対に守る！変身！」

カ「絶対に守る！覚醒！」

それを止めるため　２つの世界の冒険者達が立ち上がる
決して交わることがない
２つの物語が今混じり合う！

合作長編
この素晴らしい世界に祝福を！
　リトライ世界と悪魔世界

この悪魔にクエストを

この悪魔とクエストを

前回俺はアクセルの街に突如襲ってきた悪魔達を倒すため　仮面ライダーリバイになり悪魔バイスと協力し悪魔を撃退したのだった

カ「ふぁっあー、、ねっむ」
あれから1夜あけ次の日俺たちは屋敷に戻った
め「あ　カズマおはようです」
ダ「珍しいな　お前が朝に起きてくるなんて」

カ「珍しくて悪かったな、、ってもその原因はこいつにもあるんだけどよ」

バ「なーに　カズマ？　俺っちが何かした？」

カ「お前はとにかくうるさいんだよ！おかげで眠れやしねー」

ア「、、おはよー」

カ「アクア！お前が起きてるなんて珍しいな！」

ア「カズマには言われたくないわ、、それもこれもこいつのせいよ！この神聖な屋敷に悪魔がいるって考えたらもう眠れないわよ！」

め「２人ともあの悪魔のせいで寝不足のようですね」

と俺達が話していると

屋敷の入口からノックが聞こえてきた

カ「ん？誰だ？」
め「もしかしたらウィズかルナさんですかね　私が出てきます」
カ「あぁ　じゃあ俺もいくよ」

と俺とめぐみんは屋敷の前へと歩いていく

カ「はぁーい　今開けます、、ってあなたは！」

ジ「やぁ！カズマくん昨日ぶりだね」
カ「狩崎さん！でもなんでここにってななんで俺たちの住んでるとこ！」
ジ「街のみんなに聞いてきたんだ」
め「狩崎さん、、でしたか？どうしたのです？こんな朝に」
ジ「いやー　実は君たちに支給しておきたいものがあってね　」
め「支給しておきたいもの？」

カ「あぁ　ここで立ち話もあれですし
どうぞ中へ」

俺は狩崎さんを屋敷の中へと案内した

ア「どなたかと思ってたけどあなただったのね」
カ「おいアクア　失礼だぞ」
ジ「いやいいんだ　朝早く来てしまった自分にも原因はある　、、さて　カズマくん
この度はリバイスドライバーの件誠に感謝する」

カ「い　いやー、、」
ジ「そしてバイスタンプの回収のことも本当にご協力感謝する　さて本題なんだが
この先バイスタンプを回収するとなると　この間のようなあの悪魔達と戦うことになる」
ア「えぇ、、あんなおっかないやつと戦い続けるの、、」
ジ「そこでこちらから　支給して私が開発した武器を受け取ってもらいたいんだ」
と狩崎さんはジュラルミンケースのようなものをテーブルに置きケースを開ける
すると

スマホのようなものが４つ入っていた

カ「これって！スマホ！」
ジ「これは私が開発した　ガンデフォン５０　これを使えば　カメラで写真を撮るこ

ともちろん動画や　携帯電話としても使える」
カ「、、、まんまスマホじゃねーか」
め「凄いですね、、これほどの高性能な魔道具を作れるなんて、、」

ジ「しかしそれだけでは終わらない
カズマくん　そのガンデフォンをいじってみてくれ」
カ「え？あぁ、、はい」
と俺は言われるがままにこのガンデフォンをいじってみると、、

カ「ん？なんか押せる、、！　うぉ！」
ガンデフォンにあるボタンのようなものを押しいじると　横から銃のグリップのようなものが出てきた

カ「これって、、銃、、」
ジ「そう！ガンデフォン５０はその名の通り銃の携帯電話！　それを使えばあのデッドマンの悪魔にも対抗出来るはずさ」

カ「へぇー、、ん？待ってください　デッドマンって？」
ジ「あぁ　そういえば説明し忘れてしたね昨日戦った悪魔やあの白い悪魔あれらを総じてデッドマンと読んでいる　私の元いた世界で人の悪魔を解放させ　その悪魔を使い　世界を恐怖させる奴ら
デッドマンズという奴らがいた」
カ「そんなのが、、」
め「そんな恐ろしいのが、、」
ダ「なぁ　カズマの悪魔はそのデッドマンって奴なのか？」
ジ「さぁね、、私もこのような悪魔を見たのは初めてさ、、」
バ「ん？なに？真面目な話終わった？」
カ「お前聞いてなかったのかよ、、」
バ「ん？うお！なにこれ！　」
とバイスはガンデフォンを見るとそれに興味をもつ
バ「あ　そうだ！　そーれ！」
するとなんと

バイスはガンデフォンの中に入ってしまった

カ「え！ちょ！バイス！」

バ「ほほーい！カズマー」
画面内からこちらに手を振るバイス
カ「、、、こいつ　なんでもありだな」
ジ「はっははは！やはり君は面白いよ　　っとそうだカズマくん　君にこれを」

と狩崎さんは俺に何かを渡す

カ「ん？　！これって、、バイスタンプ！」
そのバイスタンプは緑に紫の配色で
底には鳥のようなものが掘り起こされている
ジ「協力してくれるお礼にね
そのイーグルバイスタンプを君に」

カ「新しい、、、バイスタンプ、、、」

ジ「それじゃあ　私はこの辺で　帰って色々研究しなくてはね」
カ「あぁ　狩崎さん　こんなに色々貰っちゃってすいません、、」
ジ「いいんだよ　またなにかできたら
君たちに渡すよ　きっと力になるはずだから」
と言って狩崎さんは屋敷を後にした

カ「何から何まで感謝しかないな、、」

め「本当にすごい魔道具です、、、しかもそれが４つも、、」
カ「だな、、、よしこのガンデフォン各自みんなに配っておくぞ」
ダ「いいのか?」
カ「あぁ護身用しな　、、、でもお前の場合銃でも当たらなそうだしな」
ダ「うぅ、、」
ア「これを使えば、、、あのカズマの悪魔にも効くのね」

カ「先に行っておくが　一応こいつには攻撃はしないでくれ」
ア「ちぃ」
カ「、、、さて　今日はクエストにでも行くか」
め！珍しいですね　いつもは私たちが来ましょうと言うと大抵変な言い訳をして行きたがらないカズマが」
カ「う　うるさい！　このガンデフォンの使い方とか実践を踏まえて知りたいからさ
あと　このイーグルバイスタンプの力もさ」
ア「なるほどねー、、なら！」

クエスト！
ジャイアントトードを討伐せよ！

俺たちは今アクセル付近の草原でカエル討伐しに来た

カ「またカエルか、、」
め「またカエルですか、、」
ダ「カエルか、、今日こそ捕食のヌルヌルを体験したい、、」
カ（こいつは相変わらずだな、、）

ア「この銃が本当にすごいものならあのカエルなんてイチコロよ！待ってなさいカエル！」

とアクアはカエルの近くの方までやってきていた

カ「あ！ちょ　アクア！」

ア「くらいなさぁい！」

ア「クパ　、、」

案の定食われてしまった

カ「アクアー！　」

俺はアクアを食っているジャイアントトードの所へ向かい　ガンデフォンを構える

カ「喰らえ！」

俺はカエル目掛けガンデフォンを放つと

ガンデフォンの先端から小さな光線が放たれ　カエルの腹を貫通する

と同時にカエルは地面にドタンと音を立て　崩れ倒れる

カ「、、、うっそだろ、、、」

め「カエルをワンパンですよ!」

ダ「すごい、、、だが貫通したとなると、、、アクアは大丈夫なのか、、、」

カ「あっ!やっべ!」

俺はカエルの口を開きアクアの安否を確認する

ア「うぅ、、、かずまぁぁ、、、」

よかった　ひとまずあの光線には当たってなかったようだ

カ「おい?大丈夫か?」

ア「うぅ、、、なんでこうなるのよ、、」
カ「はぁ、、」
バ「ぶっははは！なっさけないのー！」

ア「うるさいわよ！あんたは何もしてないじゃない！」

バ「へっ　俺っちにやらせたらあんなカエル　イチコロだもんねー」
カ「２人とも喧嘩すんなっての！、、、全く」

同時刻　アクセルのギルドｓｉｄｅ

あるアーチャー
「、、、」
ある魔法使い
「、、、」
あるアーチャー
「、、、」
ある魔法使い
「今日のクエストは上手くやれなくてごめん、、、また今度挑んで」
あるアーチャー
「誰のせいで上手くいかなかったんだ！あ！」
ある魔法使い
ビクッ
あるアーチャー
「だいたいお前の魔法は弱すぎるんだよ！　中級魔法を使えても威力がない　オマケに消費魔力量が少なくて数発しか打てない？」
ある魔法使い

「それは、、、」
　あるアーチャー
「まだあの爆裂魔法を使う子の方が優秀だよ！、、、　お前とはこれっきりな」
　ある魔法使い
「え、、　ちょ　まってよ！　他のメンバーはどうするの！」
　あるアーチャー
「お前ぐらいの魔法使いなんて他にも沢山いるだろ、、　お前の代わりぐらいいくらでもいる、、　じゃ」

と言ってアーチャーはギルドから出ていった

　ある魔法使い
「、、　そんな、、」

魔法使いはギルドを出てアーチャーやほかの仲間も探すが見つからなかった
　ある魔法使い

「、、くっそ、、生活費やらクエストのエリスもほとんどあいつらが管理してたからもう手持ちが、、これじゃ宿にも、、」

ある魔法使い

「なんでこんなことに、、なんで、、」

？

「それはあの男のせいでしょ？」

ある魔法使い

「！だ　誰？！」

？

「あの男が君の話なんか聞かないで勝手に話を進めるからでしょう」

ある魔法使い

「そ　それは、、」

？「、、心に渦巻いているその感情、、悪魔に、、委ねてはいかがでしょう、、」

謎の男は青くカマキリのようなバイスタンプを渡す

ある魔法使い

「、、」

人間関係！仲良くせい！

カズマｓｉｄｅ

カ「ふぅ、、ガンデフォンのおかげで今回は無事に済みそうだな」

ア「ちょっと！私が無事じゃないんですけど！」

カ「お前のは完全に自己責任だろうが！全く、、」

カズマ達はカエル討伐を終えギルドに報告しに行こうとすると前からある冒険者パーティとすれ違うと

「おい」

と、後ろの方から声が聞こえた

あるアーチャー

「あ?んだよお前かよ　お前はパーティから抜けろって言ったよな」

後ろを見ると魔法使い風の男があのパーティに話しかけていた

カ「、、、なんだ?喧嘩か?」

め「、、、みたいですね　、、何かあったのでしょうか?」

すると呼び止めていた男が懐から

バイスタンプを取りだした

カ「!あれって!」

カマキリ!

ある魔法使い

「、、ぁぁぁぁぁぁぁ!」

その男は自分の体にスタンプを押し付ける

ある魔法使い

「ギド、、俺の話、、聞けー!!」

その瞬間

その魔法使いから悪魔が開放される

ぎやぁぁ！

ギド

「ぁぁぁ！な　なんなんだよそれ!?」

魔法使い

「あっはは！最っ高だ！これ、、、」

カ「まずい!?」

リバイスドライバー！

カ「行くぞ！バイス！」

レックス！

バ（お？敵か！ワクワクするな！）

カ（いいから早く助けるぞ）

カ「はぁぁ、、」

Ｃｏｍｅ　ｏｎ　レ　レ　レ　レックス

バ「いやっふー！」

カ「変身！」

Ｂｕｄｄｙ　ｕｐ！

オーイング！ショーニング！

ローイング！ゴーイング！

仮面ライダー！リバイ！バイス！

リバイス！

バ「いやっふー！久しぶりに暴れるよー！」

カ「はぁぁあ！」

俺はカマキリのデットマンに向かって走ると

バ「レディ、、、　　ＧＯ！」

バイスはクラウチングスタートで走りだし

俺より早く敵に殴りに行く

バ「ふぉー　あたたたたたたたたた！」

高速のパンチで敵を吹き飛ばす

バ「悪魔、、、百裂恐竜拳
いぇーい　俺っち最高!」
と浮かれるバイスの後ろにデットマンが襲いかかる
カ「あいつ、、、!あぶねぇ!」
カマキリデットマンがバイスに殴り掛かろうとするが　ギリギリで避けた
カ「おい!気をつけろ!バカ悪魔」
バ「あらカズマちゃん素敵、、、最っ高だわ!、、、俺っちの愛　受け止めてー!」
するとバイスは俺の足を持ちグルグルを回す

カ「ちょ!おい!回すな!目が回る!」

バ「ぐるぐるぐる、、、どっかーーん!」

バイスは俺をデットマン目掛け投げ飛ばす

カ「ちょ！うわぁぁぁぁ！　がぁは！」
ぎぎゃあ!?

カ「うぅ、、目が回る、、」

ぎ、、ぎゃあ！

カ「がぁ、、くっ　ぐはぁ！」

バ「ぐっふふ、、さてと皆さんなんで悪魔がここまで従順だったのでしょうか？正解は　猫かぶってたからでーす！　、、でも　今まで被っていた猫を、、脱ぎまーす！、、、ぶっははは！」

ギド
「！なっなんだよ！こっち来んな！」
バ「ぶっははは！おれっちの獲物だ、、」

カ「!あいつ　!　こうなったら」

俺はベルトサイドにあるもうひとつのバイスタンプを取り出し押す

イーグル!

バ「へ?ちょ　またーー!」

するとバイスは俺の所へ吸い込まれるように俺の体内に入る

カ「はぁぁ、、」

Ｃｏｍｅ　ｏｎ!イ　イ　イ　イーグル!

Ｃｏｍｅ　ｏｎ！イ　イ　イ　イーグル！

カ「はぁ！」

Ｂｕｄｄｙ　ｕｐ！

荒ぶる　高ぶる　空掛けめーぐる　イーグル！イーグル！
お前の羽を数えろ！

カ「、、、これがイーグルの力、、、」

バ「俺っちかっこよすぎて、、、飛んでっちゃいそう」

ぎいやが！
カ「！ふっ！」
バ「うわっと！　さぁーていっくぜー！」

カ「お前ー!また騙しやがったな!」
バ「いったい?!　うわぉ!」
カ「通りで大人しいと思ったらこのやろ!」
バ「落ち着けってー」
とバイスと揉めてるうちにベルトのスタンプが一度傾く

バ「いでででで　だって?俺っち悪魔だよ?真面目にってむずくない?」
カ「言い訳すんな!」

ア「ちょっとなにやってんのよ!あいつ逃げちゃうわよ!」
バ「ちょちょカズマ落ち着いてってー」
カ「ばか!お前掴むなって何すんだよ!」
すると

リミックス!

とスタンプからなる

バ「はいはい落ち着いてねー」
カ「おま！股の下入んなっての！　おいこら！」
バ「だから落ち着いてってー」

そしてバイスの腕がベルトのスタンプにあたりもう一度傾く

Ｂｕｄｄｙ　ｕｐ！
すると胸の鳥のマークが光り出す
カ「え？　ん？なんだ？」
バ「え？なにこれ？」

すると
カ「え？ちょ　体が勝手に!?」

バ「なになになに!?」

そして2人が合体し

大きな鳥の姿になった

必殺　ミラクル　ぐるぐる　イーグル!

め「えぇー!?」

ダ「鳥になってしまった、、」
ア「もはやなんでもありね、、」
ぎぃ、、、ぎゃ?
カ「えぇー!　!そういう事か」

カ「ふっ!」
バ「え?ちょ置いてかないでよー」
カ「ばか!なんで離すんだよ!こっち来い!」

バ「はいはい　分かりましたよ　そい！」

ぎぃ、、、ぎやぁあ！

カ「ほっ　はぁ！」
バ「いやっふー　すげーぜ！飛んでるー」
カ「真面目にやれ！、、、そろそろ決めるぞ！」

ぎやぁ！
俺たちはカマキリのデッドマンズを足でつかみ空中に投げ飛ばす

カ「一気にいくぜ！」

イーグル　スタンピングフィニッシュ！

ぎやぁぁぁぁ!

アーチャー

「、、、そ　そんな、、」

カ「ふっ、、、っと　どうにか倒せたか」

め「カズマ!　大丈夫ですか?」

カ「あぁ　なんとかな 」

その時

アーチャー

「、、、ギ　ギド、、、俺は、、」

ギド「話しかけるな　もう二度と目の前に現れるな」
アーチャー
「、、、」

ギド「おい　行くぞ」

バ「ふっ」

ギド「！な　なんだよ！」

バ「ぶっははは　、、、
??????????」

カ「！あいつまた！」

俺はベルトからスタンプを抜き変身を解除する

バ「わぁ!ちょ!またーーーー!」

カ「はぁ、、、こいつ、、、隙あらば狙いやがって、、、」

こいつをむやみやたらに出すのは危険だ、、、

ア「!ねぇ　これ」

ダ「これは、、、さっきのアーチャーの男が持っていたスタンプか」

カ「だな、、、それと、、、おい!そこのアーチャー!」

アーチャー

「!は　はい、、、」

カ「このスタンプ　どこで手にしたんだ」

アーチャー「そ　、、、それは、、、」

め「早く言わないと爆裂魔法をかましますよ」

アーチャー「ま!待って!言う言うから!」

カ「脅しの内容がえげつないぞ、、」

め「こうでもしないと簡単に口を割ってくれなさそうだったので」

カ「そう、、んで　どこで手に入れたんだ」

アーチャー「あ　ある男に貰ったんだ、、　悪魔に委ねてみてはいかがでしょうって言われてそのスタンプを」

カ「ある男?その男の名前は」

アーチャー「知らない一切言ってなかった…　」

カ「なるほどな…」

その後そのアーチャーの男に宿代を少しだしてやって解散し俺たちはカマキリのバイスタンプを狩崎さんに渡しに行った

ジ「なるほど、、、バイスタンプを渡した謎の男がいたか、、」
カ「はい　あの人の話だと」
ジ「、、、やはりこの世界にもデッドマンズがいるのか、、」
ア「デッドマンズってこの前話してたヤツ?」
ジ「あぁ　おそらく私が元々持っていた10個の内数個はあちらに行っているのかもしれないね、、、」
め「あの、、、そもそもなんですが、、、なぜ　狩崎さんが持っていたバイスタンプを敵であるデッドマンズが持っていることになっているんですか?」
ジ「あぁ、、、それは　数ヶ月前　私はここは別の場所で研究をしていたんだ、、、だが　ある日私が留守にしている間に何者かに研究を襲撃されていたんだ　そしてそれと共にバイスタンプが数個無くなっていたんだ」
カ「そんなことが　」
ジ「それもあってこうやって地下に作ったってわけさ　、、、さてそのカマキリのバイスタンプは1度こちらで預かっておくよ　それを君が使えるようにしてあげるから」
カ「本当ですか!」
ジ「あぁ」

こうして俺たちはラボを後にし屋敷に戻った

カ「ふぅ、、　にしても、、なんであいつそこまでしてあのギドってやつを、、」
バ「なになに？カズマちゃん　悩み中？　それなら取っておきのなぞなぞがあるんだぜ　お父さんが嫌いな食べ物ってなーんだ　、、ヒントは　パパがイヤーなもの　あっ！答え言っちゃった！」
カ「こいつはこいつで呑気だし、、」
こんなでも外に出したら人を襲う悪魔なんだよな、、あんなのがまた暴れられたら
バ「あー　暇だなー！早くデッドマンズ現れないかなー！俺っちさっきのギドってやつに教えてやったんだぜー」
カ「は？」

バ（ぶはははは　悪魔を解放するって気持ちいいんだぜぇ、、）
カ「おい！今の話本当か！」
バ「悪魔嘘つかないもーん」
カ「、、おい　」

アクセルｓｉｄｅ

ギド「ふぅ、、」

アーチャー「ギド、、」

ギド「？、、」

アーチャー「この間のことは、、本当に済まないと思ってる、、あんなことしといて何様だって話だけど、、おれ　ギドの仲間でいたいんだ」

ギド「、、はぁ　なぁ？　俺がここに何しに来たと思ってる？　」

そしてギドは胸ポケットから

バイスタンプを取り出す
ギド「はっははは、、」

メガロドン！

屋敷ｓｉｄｅ

バ「のわぁ！っと！」
リバイ「お前！なんてことをしたんだ！」
バ「やばばだって！　」
め「！ちょっと！屋敷で何を！」
カ「お前も知ってるだろ！悪魔がどんな被害を出すか！」
バ「落ち着けよー」

カ「ぐっ、、、がぁぁぁあ！」

ダ「何をやってるんだ!カズマ!」
カ「!」
ダ「また別のデッドマンズが現れてる!」
カ「、、、」
俺は変身を解除し　ベルトをダクネスに渡す
ダ「、、、カズマ、、、何を、、、」
カ「、、、やっぱり　こいつを使うのは俺じゃない」
俺はベルトを渡し　街の方へ向かう
バ「あ、、、あぁ、、、」

アクセルｓｉｄｅ
アーチャー「うわぁぁ!」

ギド「あっははは！　最っ高だな、、、
本当に悪魔を解放するのってな！」

ぎゃぁ！
アーチャー「うわぁ！」

カ「クリエイトウォーター！」

ぎいやぁ！

アーチャー「うぅ、、ん？あれ」

カ「おいあんた！今すぐ逃げろ！」

アーチャー「、、、で　でも　」
カ「でもじゃねぇ！早く」
アーチャー「！　、、、っ」

アーチャーはギルド方面に逃げていった

カ「、、、やってやるよ、、、はぁぁあ!」

ぎしやぁ!

カ「がぁあ!　っくぅ」

ア「ちょっと!カズマ!なんで変身して戦わないのよ!」

カ「うるさい!、、、これは　俺の責任なんだよ、、、はぁあ!」

ぎぎぁ!

カ「がぁあ!」

バ「あ　あぁ、、、おいカズマ　俺っちを出してくれよ　そうしたらあんな悪魔ぶっ飛ばしてやるのによ!」

カ「いや、、、出さない　これは俺がお前を出したせいでこうなってるんだ、、、俺は　たとえクズだのゲスだの言われても、、、　俺のせいでこうなったってんな

ら俺一人で片をつける」
バ「何言ってんだよ！お前が生身で勝てるわけねぇだろ！」
カ「、、、じゃあよ　約束しろ　もし出たいなら　二度と人を襲うことをしないってな！」
バ「！、、、聞かなければ、、、？」
カ「死ぬまでこうやって戦ってやるよ　お前俺が死んだらお前も巻き添いなんだろ？」
バ「！　、、、ぐぬぬぬぬ、、、　あー！わかったよ！　おれっちの負けだ！　もう二度と人は襲わない！」
カ「、、、どうせ口だけの嘘なんだろ？」
バ「悪魔嘘つかない！」
カ「だったら　今ここで誓え！」
バ「ぐぅ、、、　わかったよ　　俺っちは、、、俺っちは　カズマの言うことを、、、守ります！」
カ「はぁ、、、よし　契約成立だ、、、ダクネス！」

ダ「カズマ！」

ダクネスは俺めがけリバイスドライバーを投げる

カ「、、、湧いてきたぜ」

レックス!

カ「はぁぁ、、」

カ（本当に襲わないんだな）

バ（しつこいぞ!だから悪魔嘘つかない!）

Ｃｏｍｅ　ｏｎ!レ　レ　レ　レックス!

Ｃｏｍｅ　ｏｎ!レ　レ　レ　レックス!

カ「変身！」

Ｂｕｄｄｙ　ｕｐ！
オーイング！ショーニング！
　ローリング！　ゴーイング！
仮面ライダー！リバイ　バイス
リバイス！

ぎじゃ！

カ　バ「はぁ！」
カ「一気にいくぜ！」

ギギャ！

カ「はぁ！　ふっ　」

バ「っちぃ　はぁ!」
ギギャ!?
め「いいですよ!カズマ!押してます!」

オーインバスター５０!
カ「ふっ　へぇぁ!」

ギギャ!
カ「のわ!」

デットマンの攻撃で　オーインバスターが空中に放り投げられる

カ「!ふっ」
攻撃を避け　落ちてくるオーインバスターを持つと

バキュン!

ギギャ!?

カ「え!なんか打った!　ってかこれ斧にも銃にもなるのか!だったら」

俺はガンデフォンを取り出し銃にする

カ「二丁で行くぜ!」

俺は打ちながらデットマンに近づき攻撃をくらわす

ぎじゃ!?

バ「ふん!　あ!カズマだけずるいー!俺っちもやりたーい」

カ「はぁ?　しょうがねぇな　ほらよ」

バ「サンキュー　へっへへ　行くぜ~!」

俺とバイスが銃で攻撃し相手を追い詰める

ギド「っははは　俺の悪魔はこんなもんじゃねぇぞ、、」
カ「!なんだ」
ギド「ははは!」
その時
アーチャー「はぁ!」

ギド「!!なんだよ!離せ!マグルス!」

マ「早く!お願いします　相棒の悪魔を止めてください」

カ「!、、あぁ!行くぞバイス!」
俺はベルトのバイスタンプを1度かたむけスタンプのボタンを押す

リミックス!

Ｂｕｄｄｙ　ｕｐ!

必殺　繰り出す　ＭＡＸ　ＬＥＸ!

バ「ぷは！俺っちしたかよ！」

カ「一気に決めるぞ」

恐竜の姿になり　デットマンを口で噛む
そしてそのまま空中に投げ　地面に叩きつけた

ギギャ！

カ「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

レックス！スタンピングフィニッシュ

バ「はいそれでは皆さん

3

2

1

あっくなあっくまー!

バ「いぇーい!ねぇねぇ　俺たちいいコンビだからよ　ほらツーショットしようぜ」

カ「ちょやめろ!」

こうして俺たちはデットマンを倒した
あのギドとマグルスってやつは自ら自首をし警察の方に連行された
俺たちはギドが使っていたメガロドンバイスタンプを狩崎さんに預け
屋敷に戻ったのだった

カ「ふぅ、、今日はほんとにいちだんと疲れたな、、」
め「お疲れ様です」
ダ「あぁ　まさかあのヘタレのカズマがあそこまでやるとはな」
カ「おいそこ　一言余計だぞ！」
ア「むぅ、、」

バ「ん？どうしたのアクアちゃん　気分悪いの？」
ア「あったりまえよ！私がいるのに悪魔と契約したのよ！これは女神に喧嘩を売ってるようにしか思えないわよ！」
バ「落ち着けよー　」

俺はこの異世界で生きていくのだろうか　冒険者として　仮面ライダーとして
デットマンを倒していくのだろうか
まぁ　だとしても

あの賑やかな奴らは変わらなそうだな

この誘拐に救済を

この誘拐に救済を

？「はぁ、、、　ギフさま」

？「おや　どうなさいました？アギレラ様」

ア「、、、私はギフ様の復活を待ち望んでるの　そのためにはもっと人間達から悪魔を解放しないと　、、、なのに

あの変なピンクの恐竜みたいなやつとそいつの悪魔のせいで解放した悪魔が全員倒されてる」

？「なるほど、、、では　そんなアギレラ様に喜ばしいことが　今ここに新たに悪魔を解放したいという人間が、、、」

アクセルｓｉｄｅ

カ「ふぅ、、今日の買い出しはこんなもんかな」
バ「お？今日は何作るんだ？カズマー」
カ「あぁ　今日はこの野菜使ってサラダやら色んなのを作ろうと思ってな」

め「おや　カズマじゃないですか」

カ「お？めぐみん　どうしたんだ　お前も買い物か？」
め「はい　クエストで稼いだエリスが溜まってきたので新しい魔道具や杖を」
カ「なるほど、、」
そう俺たちパーティは今結構普通に
稼げている

それもそのはず　最近のクエストは
大抵このガンデフォンで片付いてしまうからだ
ただしリバイスドライバーは使わないようにしている　あれは悪魔が出た時のみ使うと決めている
話を戻すがガンデフォンのおかげで討伐数も稼げて　クエストでの報酬もたんまりになり
今のところ　生活には困ってはいない
、、まぁアクアのやつがギルドに借金を抱えてたりしてるから　あまり変わらないんだがな

カ「さて　俺達もそろそろ」

とその時

きゃァァァァ！と女性の叫び声が響いた

カ「！なんだ！」

バ「うーん　あっちの方っぽいぜ！」
カ「よし　行こう」
め「あ！ちょ　待ってください！」

俺たちがその声の場所に向かうと

カ「！デッドマンズ！」
め「いきなりこの数、、、一体誰が　」
カ「分からねぇ、、ただ　この状況何とかしねーと　」

バ「いっちゃう？」

カ「行くぞバイス！」

バ「あいよ　みんなーおれっちの活躍見てねー　（あっ映画館でもねー）」

カ「お前何言ってんだ」

レックス！

Ｃｏｍｅ　ｏｎ　レ　レ　レ　レックス！

カ「変身！」

仮面ライダー　リバイ　バイス

リバイス！

オーインバスター５０！

カ「はぁ！」

バ「よーし俺っちもいくぜー」
カ「めぐみん！周りの人達の避難を頼む！」
め「分かりました！」

カ「よし　バイス！こいつら一気に片付けるぞ！」

バ「了解！」

イーグル！

Ｂｕｄｄｙ　ｕｐ！

荒ぶる　高ぶる　空駆け巡る　イーグル
お前の羽を数えろ

リミックス！

カ「ほっ」
バ「よっ！」

必殺　ミラクル　グルグル　イーグル！

イーグル！スタンピングフィニッシュ
カ「はぁぁぁぁぁ！」
リミックスによる必殺技でギフジュニアを一掃する

カ「よっと」
バ「ひゃっほーい！」
カ「、、、にしても　あの白い悪魔だけなのか？、、、いつもなら、、」

め「きゃぁぁ！」

カ「！この声　まさか　めぐみん！」

俺はめぐみんの声がした方向へ走っていった

め「！カズマ！」

カ「めぐみん！」

??「おおっと　これ以上近づくなよ
それ以上近づけば　こいつを殺す！」

め「カズマ、、、」
やつはめぐみんを人質に取っていた

カ「あの白い奴らは囮ってわけか、、、　何が目的なんだ！」

？「決まってんだろ、、、金だよ金だ！」
カ「身代金ってことか、、」

？「お前　最近有名になってる仮面ライダーってやつなんだろ」
カ「、、あぁ」
バ「あら？俺っちたち有名人なのー　いやーん俺っち変装しなきゃ！」
？「そんな力持ってたらクエストも楽だよな　らくして大金稼いでるよな！だからお前の仲間を誘拐して身代金を貰う！」
カ「そう易々と払えるか！」
？「払えないならこいつを殺す！」
カ「ちぃ、、」
？「さぁ！早くしろ！さもないとこいつを殺！」ガン！

突然犯人は力が抜けたかのように倒れ込んでしまった
め「え？」

カ「ふぅ、、　ナイスだ

アクア！」

ア「全く！私の仲間に手を出すなんて１００万年早いのよ！」

め「ア　アクア、、いつからそこに」

カ「あぁ　それはな　ここに駆けつける前に」

回想

カ「あっちか！」

ア「あら？カズマ？なんで変身してんのよ？、、げ！あの悪魔までいるし」
カ「あ？　アクア　いやさっきまでデッドマンズがいたから」
ア「ふぅーん　でなんでそんな急いでんのよ」
カ「お前聞こえてなかったのかよ　めぐみんの叫び」
ア「あぁ、、さっきまでギルドにいたから」
カ「、、お前またつけ作ったろ」
ア「何よ！どうせクエストは楽勝なんだからいいでしょ！」
カ「それとこれとは話は別だ！って
そんなことしてる場合じゃねぇ！早くめぐみんの所に」

ア「その前に千里眼でめぐみんの方を確認してみたら？」
カ「え？」
ア「だってその方が相手の裏を取れるじゃない」
カ「、、、確かにお前にしては賢いな、、」

回想終わり

カ「んでアクアに潜伏スキルを使わせて　相手の裏に回ってもらったって訳だ」
め「な　なるほど、、、」

？「ぐぅ、、、」
ア「あ！起きたわよ」
？「くっそ、、、不意打ちかよ、、、」

カ「ったく　お前生活に困ってんならちゃんとした方法で稼げ　俺だってお金に困ってもそこまではしなかったぞ」

？「黙れ！、、、俺にはこれしかないんだよ！」

コング！

？「がぁぁぁぁぁぁ！」
男が自分の体にバイスタンプを押印する
カ「！あの野郎デッドマンを、、」
バ「お？あの悪魔すげぇ腕してるぜ
パワー凄っそー！」

ごがぁぁ！

カ「！ふっ　あっぶね！　アクア　めぐみんを連れて遠くに行っといてくれ！」
ア「え　えぇ　わかったわ」

カ「よし」
バ「ねぇねぇ　カズマ　この前狩ちゃんから貰ったあれ使ってみようぜ」
カ「狩ちゃん？、、、まさか　狩崎さんのことか　あぁ　わかった」

マンモス！

Ｃｏｍｅ　ｏｎ　マ　マ　マンモス！
Ｂｕｄｄｙ　ｕｐ！
巨大な牙持つ陸のボス！　マーンモス！
はなっからクライマックスだぜぇ

バ「俺！バイスです」
カ「いくぜ！」

がぁぁ！

カ「ふっはぁ！」

バ「はぁ！」

かぎゃぁ！

カ「おっと！　ふっ　はぁ！」

背中についていたブーメランを飛ばしデットマンに攻撃を食らわす

ぎがぁ!?

バ「へへ！次は俺っちの番だぜ！」

ぎがぁ！

バ「お！　ふん！　そんなパンチこの盾の前には意味ないんだぜ！　はぁ！」

バイスはそのパンチを払い　反撃を食らわす

ががぁ！、、、

カ「よし　、、、一気にいくぜ！」

リミックス！

Ｂｕｄｄｙ　ｕｐ！

必殺　ドスドス　倒す　マンモス！

バ「それでは　皆様　出発進行です！」

するとどこからともなく線路が空中に出現しそれに沿ってゴリラデットマンにタックルをする

ががぁ！

カ「いくぜ！」

マンモス　スタンピングフィニッシュ！

カ　バ「はぁぁぁぁぁぁ！」

その時

「はぁぁ！」

カ「ぐはぁ!?」

バ「おわっ!?、、ちょっとだれ！」

どこからか　敵の攻撃が飛んできた

？「ここでこいつを倒させる訳には行かないんだ、、」

カ「！誰だ！お前」
「俺はフリオ！悪いがこいつは倒させることは許さない 」
カ「なんだと、、」
フ「こいつは フェーズ２への進化をさせる、、それを邪魔させる訳にはいかないんだよ」
バ「フェーズ２？何それ 」
フ「貴様らは知る必要は無い
はぁあ！」
カ「ぐはぁ！」
バ「おわぁ！」
め「カズマ！」
ぎゃあ！
め「！」

カ「くっそ　こいつ今までの奴とは訳が違う！」
バ「どうすんのさ　カズマ！」
カ「、、、どうするったってまずはあのゴリラを倒す！」

フ「やめておけ!!そのデッドマンを倒したら、大事な仲間を殺してやる」

カ「なんだと、、、！」

め「か　カズマ、、」
カ「めぐみん！さっきまでアクアと一緒に、、、！」
先程めぐみん達がいた所を見ると
崩れた瓦礫にアクアが倒れていた
カ「アクア！」

フ「、、、さて　お前も仲間は殺されたくないだろう、、、取引をしよう」
カ「取引だと」

フ「バイスタンプをよこせ」
カ「なに？」
フ「バイスタンプをよこせばこいつは解放してやる　今が１０時なら
あの壁の上に１２時に来い　そこで取引だ」
するとフリオはこちらに攻撃をし土煙を起こす

カ「くっ、、、！　いない！」
バ「綺麗に巻かれちゃった、、、」
ア「うぅ、、」

カ「！アクア　おい　しっかりしろ」
ア「うぅ、、、カズマ、、、ごめん　めぐみんを助けられな　かった」

番外編　花タフとこのすばメンバーのライダー映画感想言う回

カ「おーっす　花タフはいるか？」

め「あ　カズマ　どうもです」
ア「あー作者？一応いるにはいるけど、、」
カ「？なんかあったのか？」

ア「あっちの隅で泣いてるわよ」

花「うぅ、、うぅ、、」

カ「作者しっかりしろ　今回は仮面ライダーオーズ　復活のコアメダルの感想を話し

ていくって前々から決めてたじゃねぇか」
花「そうなんだけどさ！、、、まさかあーなるとは思わなかったよ、、」

ア「作者は先行上映には行かなかったから公開日の初日に行ったのよね」
花「朝イチのやつで見に行ったよ　今回のオーズについてはほんとにどうにかネタバレを回避してたんだ　先行上映されてたのは知ってたから　それで感想言ってる人の動画とかも見ないようにしたし」

カ「、、、まぁとりあえず感想を言っていこうぜ
恐らく大抵の人が作者見たくなってると思う」

花「、、、じゃあ話していきます
今回　見たのは仮面ライダーオーズ復活のコアメダル　という
オーズ１０周年記念作品となっています
先にこの映画の自分の中での評価をいいます

満点が１０だとしたら

点数は7点です」

め「まぁまぁ高い方ではありますね」

ダ「なぜ7点なんだ？」

花「えぇ　なぜ7なのかというのは

オーズらしさ　そして登場人物らしさが満載の作品であったから　、、でもところどころ尺の問題なのか　説明がふんわりしてるところもありましたね」

なので今回は7点という感想です

花「まずこのVシネの目玉はなんと言っても

アンク復活！」

ア「今までは一時的とか未来からとかだったけど今回は完全に復活ということよね」
カ「他にもキャスト陣が当時の人を全員が出ているって言うのがいいよな」

め「まぁ真木博士はいませんでしたけどね」
花「そして今回のオーズで自分が印象に受けた所を話していきます」

花「まず１つ　アンク
実はこのＶシネ　視点がアンク目線で話が進んでいくんですよね」
ア「ほんとに見てる人とアンクが同じような境遇にあるということがあったわよね」
花「アンクは１０年越しに生き返ったけど起きたら周りはボロボロ　そして古代オーズが復活　他のグリードも復活してるという」
ダ「改めてアンク視点だと特殊ではあったな」

花「そして２つ　ゴーダの存在」

花「正直言います　自分あまりゴーダが好きでは無いです」

カ「まぁ賛否が別れそうなキャラではあったな」
花「劇中でゴーダはほとんど映司に憑依してるんですよね」
ア「しかも基本的に映司の姿だから映司だけど違うみたいなのが続くのよね」

花「個人的には　タトバに変身した時に　歌は気にするなって言ってとか
コンボにしてって言った時にタジャドル！って言ってたのが、、心に来たね」
カ「、、、うわぁ」
花「結構この作品はオーズ本編のセルフオマージュが強いイメージではありました
話は飛ぶんですが　古代オーズのセルメダルを大量に使って斧で切るってのも最終
回の時のやつだったし
そして3つ
タジャドルエタニティ

カ「あれはあつかったな」
花「あそこでもね　あの最終回のオマージュを
してたんですよ」
カ「その前のアンクと本当の映司と再会するのがいいんだよな」

「んで戦い方も最終回と逆で映司が出てきて戦ってるんですよ」

そして最後、、、火野映司の死

カ「、、、」

花「、、、正直　こうなるとは思ってなかった

確かにゴーダがついてないと命が保てないからしょうがないって思ったけど」

カ「まさかここまで逆にするとは思わなかったよな」

映司が死んだのもさ　目を開けながらっていう惨いなぁって思いましたよ

その後に、、、Ａｎｙｔｈｉｎｇ　Ｇｏｅｓ　ｂａｌｌａｄｅ　ですよ、、、

映画終わった時映画館の人ザワザワ言ってましたからね

「今回の映画は本当に仮面ライダーオーズ　完結編であり

火野映司の最後を描いていた作品ではありました」

もし見見たよという読者の方がいたらコメント欄などで感想などのを、書いて欲しいです皆さんの感想を知りたいです

仮面ライダーリバイスの名場面をこのすばメンツで再現

エビル　変身

ア「もう仲良しごっこはおしまい、、、」

バット

コンファーンド

ｅｅｎｙ　ｍｅｅｎｙ　ｍｉｎｙ　ｍｏｅ
ｅｅｎｙ　ｍｅｅｎｙ　ｍｉｎｙ　ｍｏｅ

ア「、、、変身」
バーサスアップ
バットネス！ホープネス！ダークネス
バット！　ハハ！
仮面ライダー　エビル！　いやぁっひゃーー！

ア？「さぁ喧嘩をしましょう　」

ア？「また　戦いましょう、、、　カズマ」

ア（カ）「何故私が生まれたか教えてあげるわ、、すべてあなたのせいよ、、カズマ、、」

ア（カ）「元々天界で過ごしていたのにあなたのせいでこの地上に降ろされた、、その時によアクアの心の中に私が生まれ始めた、、、そこから今まで静かに過ごしていたけど

あなたが悪魔と契約したことが発端だったわ、、」

カ「、、、」

バ「どうしたんだよー　カズマ」

カ「、、、俺はよ、、どうすればいいんだ、、アクアは助けたい、、でもあぁなった原因が俺自身にあると思うと、、」

バ「、、だったら　よっぽどカズマが助けてあげるべきじゃねーか？」

カ「、、、」

バ「それによ、、あの時俺っちアクアの心の中を覗いて見たんだ」

カ「！ほんとか！」

バ「あぁ　、、あの時のアクアは、、まだ諦めてはなかったぜ」

ライブ　変身

ア「さぁ！白黒つけるわよ！」
バット
コンファーンド
ｅｅｎｙ　ｍｅｅｎｙ　ｍｉｎｙ　ｍｏｅ
アクアはベルトについている下の部分を上に裏返し銃の形へと変形させる
ｅｅｎｙ　ｍｅｅｎｙ　ｍｉｎｙ！ｍｏｅ！
ア「変身！」

バーサスアップ！
プレシャス！　トラスト　アス！
ジャスティス！
バット！
仮面ライダー　ラ　イ　ブ！
デモンズ変身

ダ「この命をかけて、、、貴様を止める！」

デモンズドライバー

スパイダー！
Ｄｅａｌ

ダ「変身！」
Ｄｅｃｉｄｅ　ｕｐ
ｄｅｅｐ　深く　ｄｒｏｐ　落ちる　Ｄａｎｇｅｒ　危機
Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅｒ　デモンズ！

ジャンヌ変身

め「私は、、、やっぱり弱かったです、、、ですが

自分の弱さを知った私は　無敵です！」

コブラ

Ｗｈａｔ’ｓ　ｃｏｍｉｎｇ　ｕｐ！
Ｗｈａｔ’ｓ　ｃｏｍｉｎｇ　ｕｐ！
め「変身！」
リベラルアップ！
ａｈ～　ｇｏｉｎｇ　ｍｙ　Ｗａｙ～
仮面ライダー　ジャ　ジャ　ジャ　ジャンヌ
ラ「ラブー」
カ「あれってまさか　めぐみんの悪魔か！」

バ「ええ!?」

め「ええ　それが今までの私です　どうか　守ってあげてください」

ア「あ！見て！」

ラ「コ　コブ　コブー　いて！　コブー、、」

バ「いやめっちゃ弱いんですけど、、」

デッドマンズのアジトをカゲロウに聞こうとする場面

ダ「デッドマンズのアジトか、、」
カ「、、どうすれば入る方法が分かる、、」
め「1つ思いついたのですが

カゲロウなら知っているのでは無いですか？」

カ「、、、」

ダ「、、、」

カ　ダ「あ！」

３人は一斉にアクアに目線を移す

ア「へ？」

カ「確かに　あいつデッドマンズの奴らと関わってたからな、、場所も知ってるかもしれねぇ。

ということでアクア、カゲロウに変わってくれ」

ア「え？いやいやいや！待って待って！そもそもどうやってあいつを出すのよ！」
め「いえ　方法はひとつありますよ」
ダ「方法？」

ア「あのー、、ほんとにやるの？」
カ「ダクネスーめぐみん　しっかり抑えててくれよ」
バ「それにしてもカゲロウ呼ぶためにわざわざライダーキックをするとはねー」
ラ「ラブー」
め「カゲロウからアクアに戻す時もライダーキックを使いました　なら今の状態でラ

イダーキックをすればきっとカゲロウに変わるはずです　ということでカズマよろしくお願いします」

カ「ほんとにやんだなー　アクア　避けんなよ！」

ア「ちょちょ！ほんとに！ホントにするの!?」

ダ「我慢だアクア　、、、正直羨ましいぞ、、」

カ「お前は羨ましがるな！」

レックス　スタンピングフィニッシュ！

ア「い　痛くしないでー」

カ「はぁぁぁぁぁ！」

バ「おぉ！どうなった！」

ア（カ）「うぅ、、なんの用？」
ダ「どうやら　成功したようだ」
め「カゲロウ　頼みがあるのです」
ア（カ）「頼み？」
ダ「あぁ　カゲロウ　お前は以前デッドマンズの奴らと絡んでいたな」
ア（カ）「えぇ　それがなに？」
カ「単刀直入に聞く　奴らのアジトにはどうやって入れる」
ア（カ）「ふっ私がそんな言うと思うか？」
ダ「ならば私たちのライダーキックもくらうか？私たちはカズマ程手加減はしないぞ、、」
ア（カ）「、、まだ教えないとは言ってないじゃない、、なら条件があるわ」

ア「もう、、取り返しがつかないのよ、、もう！私は、、」

ダ「まだ！やり直せる！失敗したっていい、大事なのはその失敗から、どうするかだ、、、」

ア「ダクネス！」

ア「、、、わかんない、、、どうすればいいのよ　、、、助けて、、、助けてよ…

カゲロウ、、、」

「全く、、、やっと助けを求めたわね」

ア「カゲロウ、、、生きてたの、、、」

「いつ死んだなんて言ったのよ　私はそいつの中にずっといたの」

「でも、、、私はあなたとの戦いを無駄にしたくなくて、、、」

ｐｅｒｆｅｃｔ　Ｗｉｎｇ!!

コンファーンド

Ｗｉｎｇｓ　ｆｏｒ　ｔｈｅ　ｆｕｔｕｒｅ！（ｆｕｔｕｒｅ！）

Ｗｉｎｇｓ　ｆｏｒ　ｔｈｅ　ｆｕｔｕｒｅ！（ｆｕｔｕｒｅ！）

ア　カ「変身！」
Ｆｌｙ　ｈｉｇｈ！
ｐｅｒｆｅｃｔ　ｕｐ！
ＨＡ　ＨＡ　ＨＡ　！
仮面ライダ～　エビリティ、、、
ラ～イブ～！
Ｉ，ｍ　ｐｅｒｆｅｃｔ!!

カ「アクア、、、」
ア「カズマ、、、ごめん　それと、、、ただいま」
カ「あぁ　おかえり」

４８話再現

カ「、、、」

狩「まだ、、、まだだ！私は、、、あの男に、、、勝つんだ、、、」

ミ「もういいじゃないですか　狩崎さん」

カ「ミツルギ、、、」

ミ「真澄さん　あなたとも思い出をこの世界にも持ってきていたんです」

狩「、、、そんなのはどうでもいい、、、

そんなのはどうでもいいんだよ!!」

カ「、、、全部　狩崎さん、あなたのアイディアから始まったんですね」

ミツルギが持ってきた１０枚の絵
それぞれに
レックス
メガロドン
イーグル
マンモス
ライオン

プテラ

カマキリ

コング

ジャッカル

ブラキオ

が描かれていた

カ「真澄さんは、あなたとの思い出を

大切にしていたんですよ」

狩「、、、ダディ、、、俺じゃ無理だよ、、、

ダディ！会いたいよ！

ダディ!!なんで先に逝くんだよ！

まだ話してないことがあるのに！

ねぇ！ダディ！、、、」

カ「狩崎さん、、、」

バ「へへっ　これにて一件落着ってか」

め「いました!カズマー!」

ダ「良かった、、、無事説得は出来たようだな」

ア「はぁー　一時はどうなるかとどうなるかと思ったわー　よくやったわねカズマ」

バ「ちょいちょーい!俺っちも含めてよ!」

ア「悪魔にお礼なんて二度とごめんよ」

カ「、、、」

ミ「、、、どうした?カズマ」

め「、、、かずまー？」

ダ「カズマ？」

バ「カズマ、、、まさか、、、嘘だろ、、、」

め「、、、カズマ、、、」

ダ「、、、」

カ「なぁ　バイス

この人達　だれ？」